

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

※当報告書についてはユネスコスクールホームページに掲載するため、活動内容については、添付資料ではなく本報告書にご記入願います。

特定非営利活動法人横浜シュタイナー学園のESDへの取り組み

横浜シュタイナー学園のESDの取り組みは教育活動全般に渡りますので、ここでは特徴的な活動を取りあげて報告いたします。

■ 自国文化理解に関する活動

横浜シュタイナー学園では、1年生の文字の導入から始めて、わたしたちの固有の文化が成立してきたプロセスを体験的に学んでいる。さらに、3年生では稲作や家づくり体験を中心に生活の営みを支える文化の学びがあり、4年生の郷土学、5年生から始まる日本史へとつながってゆく。このような自国文化理解につながるひとつながりの学びをかたちづくる独自のカリキュラムにより、ESD的な自国文化理解を自然に実現している。以下はその具体例の一部である。

- 4年生の郷土学で、都筑区の貝塚見学、堂ヶ坂の室町時代の切通し見学。
- 5年生は、日本史のエポック「縄文時代」の学びで、粘土に砂を混ぜ込み、縄目をつけ、本格的な縄文土器をつくりあげた。乾燥させた土器は、野焼きで焼き上げた。
- 6年生は日本史の学びの一環として、毎年、京都・奈良旅行を行っている。昨年もそうだったが、訪問した歴史文化施設の担当者から「生徒の関心のもち方が深い」という言葉をいただいた。
- 6年生の英語の授業で、日本の古典落語「時そば」を取りあげた。落語に造詣の深い保護者と9年生生徒のふたりに日本語の「時そば」を披露してもらい、その後、落語の形式や所作を学んだ。さらに、簡単な英語バージョンの台本をもとに、二人一組の劇形式にして全員が発表し、参観した保護者や教員たちを爆笑の渦に巻き込んだ。
- 7年生（中1）の歴史では、鎌倉時代の学びとして鎌倉へ見学に行った。また、室町文化の体験として狂言や能の謡にとりくんだ。
- 9年生（中3）は、にいほる里山交流センターの職員による指導の下、里山の農家で編まれていた竹籠編み細工に取り組んだ。また、手仕事専科の時間には、本格的な和裁による浴衣、甚平を手づくりし、全校の学習発表会には実際に身につけて発表した。

■ 国際理解教育に関する活動

横浜シュタイナー学園では、世界史の学びを通して世界地理と多様な文化の基礎を理解し、その土台の上に高学年では近・現代史にも触れていく。また、英語と中国語の2か国語を1年生から継続的に学び、言語文化を通して国際感覚

を育てている。1年生から積み上げることにより、高学年ではコミュニケーション能力もかなりついてくるため、ここ数年、海外との交流も積極的に行うようになった。その活動の一部を以下に列挙する。

1. 海外の学校との文通（英語科）

- 昨年の6年生に続き、今年度の6年生も韓国の□□□□□(Prunsup Waldorf School / 緑の森の学校) および中国の成都华德福学校 (Chengdu Waldorf School) と英語で文通を始めた。韓国からは返事がきて2度目の手紙をしたためている。英語の時間以外でも、6年生は韓国の国のなりたち・文化について、学園の体育教師でもある在日3世の韓朱仙 (ハン・チュソン) 先生から話を聞く機会をもった。自分たちの名前や、好きな韓国料理をハングルでどう書くか教えてもらった。
- 9年生は、昨年に引き続き、オーストラリアのオラーナ・ウォルドルフ・スクールと文通をしている。同校でも外国語として日本語を学んでおり、文通は日本語と英語の両方で行った。来年度4月に、彼らが修学旅行で来日することが決まり、下の学年 (現8年生) が交流を引き継いでいく。

2. ゲストティーチャーによる授業

英語のゲストティーチャーとして、海外および日本在住の外国人の方をお招きし、英語で話を聞き、ワークショップを行った。

- 6月19日 ジリアン・ショーさん (元玉川大学講師)
来日してから長く日本に住み続けてきたイギリス人のジリアンさんが、どのように日本語と日本の習慣を身につけていったのか、面白おかしく話してもらい、たいへん楽しい時間だった。生徒たちは、異文化を受け入れ、外国語を身につける姿勢を学んだ。(8年生、9年生)
- 10月15日 デイヴィッド・アンダーソンさん
ニューヨークで劇団を主宰し、自身俳優でもあり演劇を教える教員でもあるデイヴィッド・アンダーソンさんに、狂言「附子」をもとにした英語劇「A Pot of Poison」の演技指導・演出アドバイスをしていただいた。静と動、真面目さとユーモラスさなど、役になりきることで対極の要素を体験した。(5年生)
- 10月15日 デイヴィッド・アンダーソンさん
演劇ワークショップを行った。身体を動かしながら、一人ひとりが英単語を表したり、グループでひとつテーマ (例えば春・夏・秋・冬) を表現したりする活動をした。英語という言葉をも、日本語を介さず直に身体で表現する (例えば flower という音の響きを味わいながら、身体全体を使って flower を表現する) 貴重な体験ができた。(7年生)
- 10月15日 デイヴィッド・アンダーソンさん
クラスで「ヴェニス商人」の演劇に取り組んでいた8年生は、このシェークスピア劇をどのように演じたらよいのかというヒントを、デイヴィッド・アンダーソンさんとのワークショップを通じて得ることができた。それは、それぞれの人物になりきって行う動作であったり、声の響きだったりするも

ので、言語を超えて通じ合うものを生徒たちは感じたようだった。

- 10月20日 ジリアン・ショーさん（2回目）
学生時代に演劇を学んだジリアンさんに再び来ていただき、英語劇“The Wizard of Oz”（オズの魔法つかい）の演技指導と発音指導をしていただいた。ネイティブ・スピーカーにもわかる台詞を、と生徒たちは張り切って演じ、ジリアンさんから激励の言葉をいただいた。
- 2月20日 マイケル・リッチさん（横浜桐蔭大学講師）
イギリス人ミックさん（マイケルさんの通称）をお迎えし、身体を動かしながらのゲームから始まって、「イギリス」のイメージ、そしてミックさんが日本に来て困ったことは何かを生徒たちに考えさせ、英語での質疑応答を行った。普段当り前に感じていることが、言葉が分からないとどのように感じるのか、ということを生徒たちは実感できたと思う。例えば、自動販売機で飲み物を選ぶときに、書いてある文字が読めないとどうなのか。また、お風呂に入るときのマナーの違いや、混み合った電車の体験が外国から来た人にとってどのような体験なのかなど、異文化について生徒たちに身近で具体的な例をあげながら、分かりやすく体験できた授業だった。
- 10月11日 ジョン・ビリングさん（国際的ライアー奏者）
イギリスのライアー奏者によるコンサートを3～9年生が鑑賞した。アイルランドの曲、クラシックの演奏を聴き、また日本のわらべ歌や中国の曲をジョンさんのライアーと子どもたちの歌で共演する場面もあり、和やかなひとときとなった。

3. 中国語による演劇上演

- 飯田橋の日中学院の朗読大会にて、4年生が中国語の時間に学んだ「三字経」を発表した。大学生や社会人ばかりの発表者のなかでの4年生たちの朗々とした発表に、日中学院の先生方から称賛の言葉をいただいた。
- プロの京劇俳優にアドバイスをいただきながら、孫悟空の中国語劇上演を5年生が行った。磨き込まれたプロの動きに、子どもたちは大いに触発された。

4. その他

- 北欧神話や古事記の学びなど、神話世界の学びを通して、さまざまな文化の根底に流れる原型的イメージを体験している。（4年生）
- キング牧師のスピーチを英語の授業でとりあげ、背景を学びながらスピーチした。（9年生）
- DEAR 教材による「世界がもし100人の村だったら」ワークショップ。（9年生）

■ 地域素材の活用

地域素材の活用としては、学園に隣接して広がる横浜北部随一の広大な里山（新治市民の森）の活用と、その里山を管理するNPOにいはる里山交流センターとの交流事業が継続的な取り組みとなっている。

- 谷戸田での米づくり
地域のたんぼの会の協力を得て、谷戸田を一区画お借りし、田植えから収穫までを一貫して体験している。泥まみれで代掻きから田づくりを体験し、収穫した稲の脱穀も体験。収穫した米は、にいほる里山交流センターの協力を得て、里山の古民家のかまどで炊いて食した。稲わらは、家づくりの授業で建てた家の屋根を葺くためにも用いた。稲作の指導は、教員が交流センターの谷戸田を守る会に参加して学ばせていただき、子どもたちは同会の会長さんから谷戸田の米づくりについてのお話をうかがった。(3年生)
- 植物学の生きた学習材料として
三保市民の森、新治市民の森は、日本有数のシダ類の宝庫だと言われている。5年生の植物学では、森のなかで羊歯や菌類、広葉樹林、針葉樹林の観察を行い、学びに活用している。
- 川の源流探索
地理の授業では、里山に流れる梅田川の源流（三保市民の森のなかに源泉が湧きだしている）を訪ね、「つながり」の面白さを体験している。(4年生)
- 里山の産物を利用した工芸体験
9年生の竹籠編みの体験（自国文化理解の項参照）

■その他の教育活動

- 3年生の生活の学び
学園では、3年生の時期に体を使って生活に関わる体験に集中的に取り組むカリキュラムが組まれている。
 - a) 家づくり
クラスの子どもたち全員が入れるほどの家を実際に建てた。皆で地鎮祭の儀式を行い、竹を素材に縦穴式住居スタイルの家を建てた。屋根の一部は、稲作で収穫した稲藁を使って葺いた。(家のスタイルは毎年変わる)
 - b) 職人の仕事の学び
家づくりの学びの一環で、釘を使わない木組みの家の建築現場を見学。クラスメイトの新築中の家で、子ども部屋の壁を塗る左官体験もさせていただいた。
地域のNPOが運営する天然酵母パン工房「ふかふか」でのパン焼き体験。皮革職人をされている保護者の職場を見学。
 - c) 米づくり、畑づくり
新治市民の森の谷戸にある田んぼで、無農薬の稲作を代掻きから収穫まですべてを体験した。
徒歩圏にある校舎の大家さんの畑で、里芋などを育て、収穫した。
- 物理の電気の学びのなかで、電気を作る方法と利用先について学んだ後、さらに環境にやさしい発電・利用について話し合った。(7年生)
- 2014年4月 ベルトルト・ブレヒトの戯曲「ガリレオの生涯」上演（9年生）
学園のホールを小劇場に仕立て、ブレヒトの戯曲上演に取り組んだ。大道具、小道具、衣装のデザインと製作、音楽も生徒みずから作曲演奏した。各回70名の観客の前で、全4回の公演を演じきった。「人間にとって科学とは？」と問う主人公の最後の言葉は、震災後の同時代を生きる観客の心を打

った。

- 2015年2月 シェークスピア「ヴェニスの商人」を上演（8年生）
定員180名の小ホールをお借りして、本格的なシェークスピア劇を上演した。生徒たちは舞台となった16世紀のヴェニスに思いを馳せ、当時の服装や音楽について調べ、衣装や靴を手づくりし、選曲をした。また、高利貸しシャイロックを通して、なぜユダヤ人は差別を受けていたのか、お金を貸すことで金利を得ることがなぜ悪いことと考えられていたのかについて考えた。このように演劇に取り組むことを通じて、舞台づくりの本来の体験的学び以外にも、国際的な文化、社会問題の理解を深めることができた。
- 卒業プロジェクト（9年生）
9年生（中3）の卒業プロジェクトでは、約1年をかけて、自由課題として以下のテーマに取り組み、保護者やゲスト約140名の聴衆の前で堂々と発表した。発表後には質疑応答がなされ、質問者の問いにきびきびと答えていた。
 - a) 「宮沢賢治の心象」（男子）
 - b) 「日本書の歴史」（女子）
 - c) 「歌舞伎」（女子）
 - d) 「パレスチナ難民」（女子）
 - e) 「民主主義とは」（男子）
 - f) 「帯の歴史」（女子）
 - g) 「日本国憲法が守っているものとは？」（男子）
 - h) 「落語の魅力 —自分と落語の登場人物—」（男子）

■近隣の里山とのつながり

この1年、地域の豊かな資源である里山で活動する様々な団体や個人とのつながりを深め、学園版Rice Projectである「お米から始まるホリスティックラーニング」の実績を着実に重ねてきた。

- 2014年3月22日（昨年の報告書に収録できなかったので記載します）、里山保全の学びを開催。にいほる里山交流センターを会場に、同センターの吉武美保子さんから里山の魅力と課題についてお話しいただいた（教員保護者対象）。大都市にぽつりと残った都市型の里山の特殊性（オーバーユース問題）を学び、その後は子どもたちも合流し、実際に山中を歩きながら、神奈川県で箱根、丹沢に次いで生物多様性に富むと言われる新治市民の森を貴重な地域素材として大切に活用していくための研修を行った。研修の内容は記録して学内共有する方向で作業を進めている。今後は、この学びを授業にも採り入れつつ、同NPOとの共同の可能性を広げていきたいと考えている。
- 2014年11月22日、にいほる里山交流センター・スタッフであり、田んぼクラブの元代表でもある遠田文恵さんを講師に、講座「お米から始まるホリスティックラーニング」を開催した。講座終了後は、学園がお借りしている谷戸の田んぼを訪問し、現場を見ながら質疑応答の時間をもっていただいた。
- その他、「地域素材の活用」、「3年生の生活の学び」の項を参照のこと。

■教職員保護者研修および交流活動

- 2014年8月、ユネスコESD優良事例に応募し、優良事例集に収録され、また文部科学省より認定証をいただいた。テーマは「化学・農業実習を通して地球環境を学ぶ」。2014年11月24日に文部科学省で開催された全国フリースクール等フォーラムのキースピーチのなかでも、このことが紹介された。
- 2014年8月、ユネスコESD世界大会の岡山宣言・世界に届けたいメッセージに「自己変容」をテーマにしたメッセージを応募。宣言採択の報告をまとめたACCUの出版物に収録される予定との連絡をいただいている。
- 2014年11月6日付の毎日小学生新聞で、世界大会の開催にあわせて組まれたESD特集の一環として当学園の取材記事が掲載された（別紙資料添付）。
- 2014年11月6～9日、教員と保護者各1名がユネスコESD世界大会（高校生フォーラム参観）および全国大会参加。
- 2014年11月21日、横浜市立永田台小学校で開催された第46回全国小中学校環境教育研究大会に参加。活動紹介のパネル展示を行った。
- 2014年12月6日、玉川大学で開催された玉川大学ユネスコスクール研修会「ESDと教師教育－持続可能性を志向する授業づくりの新たな展望」に参加（教員1名、保護者1名）。
- 2015年1月、第6回「ユネスコスクールESDアシストプロジェクト」に申請。申請プロジェクト名は『「個」の育成に基づくESDの深化プロジェクト』。個の発達－社会と自己－地球規模の自然現象と人間という視点から当学園の取り組みを整理し、その実践に必要な費用についての助成を申請した。
- 2015年1月10日、神奈川県立有馬高校で開催された2014年度神奈川県ユネスコ・スクールセミナーに参加（教員1名）。谷戸田での米づくりなどの実践報告をした。
- 2012年にASPUnivNet校・大阪府立大学の吉田敦彦さんをお招きし、シュタイナー教育とESDの関係性やユネスコスクール加盟の意義について語っていただいた講演録「未来をつくるシュタイナー教育」をまとめ、2015年1月に学内向けに配布した。
- 2015年よりASPUnivNetに加盟した東海大学教養学部より声がかかり、当学園のESDチーム・メンバーがアドバイザーとして同校の活動に関わる予定。
- アジア地域のシュタイナー教育実践者が2年ごとに各国を巡回して開催している大会「第6回アジアヴァルドルフ教員大会」（2015年4月15日～5月1日、学校法人シュタイナー学園にて開催予定）の受け入れ国として、他校と協力して開催準備を教員と保護者が手弁当で進めている。この大会には400名以上の教員と40名もの講師が参加し、基調講演と36の専門分科会を中心にした教育的研修とともに、アジア地域の文化交流や日中韓の三国対話を行う予定。日中韓対話は、2013年の韓国大会で行われた日韓対話の成果を引き継いで行われる。

特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園 ユネスコスクール平成 26 年度活動報告 資料



地域の NPO に協力いただいた事業

「お米から始まるホリスティックラーニング」

2014 年 11 月 22 日

講師に横浜市にいはる里山交流センター・スタッフの遠田文恵さん（左から 2 番目）をお迎えして開催しました。

写真は講座終了後に、学園がお借りしている谷戸田を実際に見回りながら、谷戸田の稲作の特徴などを学びました。



第 46 回全国小中学校環境教育研究大会での パネル展示

2014 年 11 月 21 日

横浜市立永田台小学校で開催された第 46 回全国小中学校環境教育研究大会に参加し、活動紹介のパネル展示を行いました。

開催校の横浜市立永田台小学校は、神奈川県ユネスコスクールをつなぐネットワークを呼びかけてくださっており、この大会とは別に神奈川交流会が開催されています。今年度は、2015 年 1 月 10 日に神奈川県立有馬高校で開催され、横浜からも教員が参加しました。



文部科学省の呼びかけで初めて開催された 全国フリースクール等フォーラム

2014 年 11 月 24 日

文部科学省の講堂で開催された全国フリースクール等フォーラムのキースピーチで学園の ESD の取り組みが紹介されました。

画像は文部科学省 mextchannel より引用。

https://www.youtube.com/playlist?list=PLGpGsGZ3lmbBK96QRysiCE_VF7gX8JgL7

毎日小学生新聞

きょうの紙面

- お天気宅配便[アメダス40歳!] …… ②
- 凶解なるほど[白鶴 優勝なるか] …… ④⑥
- スポーツ 君もできる[長距離走①] …… ⑦
- 毎小運動部[プロ野球日本一にソフトバンク] ⑧
- News まっつ(世界) …… ⑨
- 詩集 なんとかしなきゃ!プロジェクト・別刷り

毎日小学生新聞編集部
おたより 〒100-8051(住所不要)
ファクス 03-3212-2591
メール maishou@mainichi.co.jp
電話 03-3212-3274(編集)
0120-468-012(購読について)
発行所 毎日新聞社
東京本社 東京都千代田区一ツ橋1-1
定価 1か月1580円(本紙183円、消費税17円)・1年16000円

みんなを遊ばすための家、どんな家かできるとかな。4日、横浜シユタイナー学園で



数週間にもわたるエポック授業や手仕事、水彩などユニークなカリキュラムを持つシユタイナー学校。世界には約1000校、国内には8校あり、うち3校がユネスコスクールに認定されています。【上東麻子、写真も】



昨年の3年生が造った家。毎年、ちがう家が出来ます。学園提供



シユタイナー学校では3年生で「家造り」の授業をします。9歳は自分と外の世界を意識し始める時期。しっかりと地面に根を下ろし、自分の外側と内側の壁を作る意味があるといえます。約1か月間かけて家について学び、仕上げが自分たちの手で家を造る作業になります。

3年生で「家造り」の授業

直徑3分の円の中心に木の柱を立て、竹の横板を組み、シユロでできたひもで結んで組み立てていきます。竹は地元の方からいただいたもので

神奈川県横浜市の緑区にある横浜シユタイナー学園の校庭で、3年生の家造りの授業が行われています。担任の小林裕子先生と子どもたちが、試行錯誤しながら家を造っています。

ながら「造」と書いていきます。写真、家など大きなものを造る時に使います。この学校では、すべての漢字を成り立ちから学びます。



「今日の漢字はこれです。」小林先生が黒板を開き、黒板に「造」の字が描いてあり、元になる絵が描いてありました。「神様にささげ物をしたから来ています」と説明し

す。屋根に使う輪っらは、6月に「暮らしと仕事」の授業で田植えし、先月刈り取ったものを使います。

イメージから学ぶ家造りの作業の前には教室で、「家」に関するさまざまな

●シユタイナー教育●
オーストリア出身の思想家、ルドルフ・シユタイナーが提唱した人間観にもとづく教育。体験や手仕事、芸術の学びを重視した独自のカリキュラムがある。3~4週間集約的に学ぶエポック授業や教科書を使わない授業、テストがない、8年間同じ担任などが特徴。横浜シユタイナー学園はNPO法人が運営するフリースクール。2005年に開校し、現在1~9年生計109人が学んでいる。

フリースクール

国が初の支援へ

不登校の子どもの受け皿に
なっているフリースクールへの支援に、国が初めて乗り出すことになりました。文部科学省内に「フリースクール・不登校に関する検討チーム」を設置。2016年度の概算要求(各省庁が財務省に提出する翌年度の予算)に、調査費用など1億円を盛りこみました。

小学校の不登校児童の数は2013年度は2万4175人(前年度比6.9%増)、全児童に占める不登校の割合は0.36%を過去最高。中学生は9万5442人(同0.6%増)、37人に1人が不登校になっています。

全国のフリースクールは約400校あるとされます。不登校の子どもたちが通うほか、さまざまな教育方針を持った全日制のスクールもあります。学校長の裁量で、出席扱いにできませんが、法的な位置づけはありません。また、公的な支援がないために、経営が厳しいところも多いのが現状です。

文科省は24日に全国の関係者を集めたフォーラムを開催。フリースクールの制度上の位置づけや学習面、経済的支援のあり方などを検討し、12月に有識者会議を立ち上げ、来年度中に提言などをとりまとめる予定です。【上東麻子】

「白……小林先生が静かに語り始めると、雪だ」と子どもたちから声が上がります。そう。寒い雪と氷の世界。夜は寒い。どうする。「先生の問いかけに、いかまくらを作る」穴をほって土の中に潜る。「氷のブロックにして積み重ねたら」と次々とアイデアが飛び出します。

「氷のブロック、いい考えね。そう、だからこの人たちはこんな家を造りました」先生がもう片方の黒板を開くと、エスキモーの人たちがすむ氷のブロックで造った家「イグルー」の絵が現れました。

「うわあ、すごい」みたとあると、歓声があがりました。――2面につづく



アメリカ 中間選挙
オバマ民主党が敗北
アメリカの上院議員の一部と、院議員などを選ぶ中間選挙。3面にニュースのことは4日、投票日になりました。下院(定数435)は、野党・共和党が過半数(215)を維持し、現有233議席を上回る議席を獲得する見通しです。上院(定数100、改選36)でも共和党が議席を伸ばし、過半数をうかがう勢いです。

共和党は、民主党のオバマ大統領への対決姿勢を強めると考えられます。オバマ大統領の任期はあと2年あまりあります。が、政策実現はさらに困難になりそうです。

て づく 手作りの "教科書" で学ぶ



自分たちの考えた家を1人ずつ発表しました

横浜シユタイナー学園



4

1面からつづく

エポック授業

この学校では歴史、文字、数、

動物学など一つのテーマを3〜4週間続けて学ぶ「エポック授業」(100分間)があります。「家造り」もその一つ。「細かい学びではなく、一つの教科やテーマにじっくりと浸る」ことを大切にしています。しばらくの間、別の教科を学ぶのでその間に、細かいところは忘れてしまいますが、本質的なことは

残ると考えられています。

教科書がないのも特徴です。

先生が黒板に描いた絵を写したり、語った内容を自分でまとめたりしてできた何冊ものノートが「教科書」になるのです。卒業までに何十冊にもなるノートを生徒たちはとても大切にしているといえます。

何事にもポジティブ

「普通の教科書には結論が書いてありますが、ここでは先生と一緒に自分たちの「教科書」を作り上げます」と6年担任の神田ひとみ先生は話します。神田



水彩の授業では、旧約聖書に出てくる家を描きます

先生は公立小学校で教師をしていましたが、シユタイナー教育に魅力を感じ、今はこの学校で働いています。「シユタイナー学校では、子どもたちが学ぶことに疲れることなく、ゆったりと学んでいます」と話します。学園では今年までに1期生15人の卒業生を送り出しました。1期生を9年間担任した長井麻美先生は、卒業生について「何事にもポジティブに取り組み、学ぶことにも前向きなのが共通している」といいます。「風変わった学びの試みが、美を結びはじめられているようです。」

つづく